会員の声

「昭和は遠くなりにけり」

山形市在住
太田　金廣
（昭和34年農学科卒）

私は昭和8年生まれなので、今年で数え年88歳のオールドボーイ。今年は昭和で数えると95年。大学時代にははるか彼方の大昔。記憶は薄れつつあるが、思い出の断片を少し記してみたい。

（1）入学時の昭和30年、1年生は全学部山形で一般教養の集中講義だった。まず英語の講義を例にとる。

大学教授、正に格式とレベルが高校とは全然雰囲気が違う。教授がひとしきりリーディングをし、その大意を解説する。つぎに今触れた事を、任意に突然学生を指名し、リーディングを繰返させ文章を説明させる。これが恐怖の時間だった。

私は実業高校の定時制出身、満足な受験勉強などしたことがない。読み方はたどたどしく、文脈も整然と説明できない。そこで聞きかねた教授から叱声が飛ぶ。何というお粗末さなんだ。間違って大学に入ってきたんじゃないか、こんな程度では今山形東高を受験しても入れないぞ!!

こちらは、消え入らんばかりに下を向き沈黙するばかりであった。教室中シーンとして水を打ったように声なし、恐怖の時間だった。その代わりこちらは必死になって勉強に励んだ。厳しいと噂の高い名物教授であった。

（2）昭和31年、農学部2年生は鶴岡に居を移し専門教育課程に入った。大学は単位修得が選択制であるので時間に余裕がある。そこが大学生活の楽しいところである。自由さ。

農学部での講義では、農政学の講義が印象に残っている。担当は石川武彦農学部長だった。造詣が深く、蘊蓄ある講義に聞き入って面白かった。唸るばかりである。経済合理性、生産性の向上など、今まで耳にしたこともない言葉に聞き入った。

私の生家は鶴岡まで4キロほど。稲作農家で代々人手不足であったので、講義のない時間は馬を使って馬耕をし馬車引きもした。

或る日農作業の合間をぬって講義にかけつけたが、時間がなく着換えも出来ず、泥ジャンパーのまま教室に飛び込んだ。講義の前、恐る恐る教授に「こんな恰好で出席して済ませません」と詫びを入れた。意外にも教授から「いや差支えないよ。赤いネクタイなどを締めてその辺をチャラチャラしている学生よりずっと好感が持てるよ」との有難い言葉をいただいたのには恐縮し感動した。学者の鷹揚な度量を見る思いがして嬉しかった。

（3）カルチャーショック。農村生れと都会育ち、受験校出身と農業高出身の基礎学力差の大きさ。スポーツでのトップ選手との実力差などいくつかのカルチャーショックの埋め合わせには幾多の苦労をした。

馬場盛司さんは仙台の名門校出。いつの間にか意気投合し、下宿にしょっちゅう入り浸っておしゃべりを、終わるとビールを飲み、その空きビンを部屋の鴨居にずらりと並べ、農村と都会のギャップを教えてもらった。

柔道の鈴木富雄さん（現姓桃崎）には柔道で良い稽古をつけてもらった。何しろ強い強い。跳腰で数知れぬぐらい投げられたが、聞けば県の強化選手、全国のトップレベルということで段違いの強さだった。この稽古が後に重量挙げに転向し国体に出場出来るきっかけになったのは幸いだった。

（4）時代を経て、現在は30数年勤めた職場を退職してから30年余、時の流れは早く正しく光陰矢の如しである。幸い健康にして薬いらず医者いらず感謝の毎日である。大学で鍛えられたこと、学んだことを財産にして、今後もより充実した日々を送るよう努めるつもりである。

（5）山形大学の今後の発展を心からご祈念申し上げます。

「若き日の山形を偲ぶ」

神奈川県平塚市在住
浅羽　勉
（昭和39年農学科卒）

卒業後23歳冬

約60年前の記憶をたどり、①山形大学志望動機②教養課程から鶴岡に移るまで③鶴岡農学部時代から卒業まで順を追って記憶の許す限り語り尽くしたいと思います。

①志望動機は極めて簡単でした。国立二期の大学で受験料・入学金も親に負担なく且つ受験倍率も低く、そして東京大学で受験できる事でした。合格し易い下地が揃っていました。

②入学手続きで山形に生まれて初めて足を踏み入れ、大学所在地も判らず右往左往し、地元の人の助けを借り大学にたどり着きました（山形弁の理解に困った事覚えています）。山形の人々の親切、やさしさ、心温まる対応に感激しましたネ。

教養課程期間中は学費、授業料、生活費の捻出にアルバイトで生計を立て、授業は二の次で必要単位修得に四苦八苦状態でした。また、当時は六十年安保闘争でキャンパスが乱れ放題で大変でした。学生運動に引き込まれ、更にアルバイトの収入も減少し、過激派学生のレッテルを貼られ警察に目をつけられ、キャンパスを出ると職務質問される羽目も経験し、下宿先も変えざるを得ない始末で散々でした。

学生運動も沈静化してやっと落ち着いたのが夏を過ぎた頃でした。アルバイトも出来、生活感を取り戻し、山形の人々との交流が心のゆとりに結びつきました。

時は流れ秋が迫り、同時に鶴岡へ移る準備に追われ始めました。単位修得に苦戦しましたネ。学業二の次でしたので出席日数も厳しく代弁で日数調整を友に頼みました。代弁については教授も良く知っていて「今日はやたらと同じ声が耳に響きますネ。」と笑って見逃してくれていました。粋な先生方が居られたなと思っていました。感謝の言葉に尽きます。

容赦なく時は進み、鶴岡に赴く時期となりました。親しくなった方と別れを告げ最終便に乗って山形を後にした訳ですが、学生とは申せ、辛く悲しい別れを経験しました。教養期間で出会った人々と語り合って時を過ごした事、忘れられない人生の一楽章でした。

③鶴岡駅に着き初めて足を踏み入れたのは寒い日でした。翌日下宿先から農学部に赴き手続きし、生活がスタートしました。山形市と異なる厳しい環境に迎えられ前途不安に感じたネ。バイト先も見つからず予測通りでした。しかし鶴岡の人々の温かさ、やさしさ、親切に触れ不安が払拭されました。

大学では実験室で研究に没頭し過ごす時間が多くなり、生活様式の変化も楽しく受け入れ過ごせました。時折外部の人との交流も気分転換となり、厳しい季節の中でもエンジョイできたのが救いでした。大学のダンスパーティーで知り合った看護師と親しくなり、癒しの時間を得て卒業まで楽しく過ごしました。

卒業後、横浜の病院で勤務することになった彼女と結婚し、現在もそれなりに仲良く60年の結婚生活になりました。私の宝物です。

山形大学の4年間は本当に人々との絆で楽しく生活できたことが財産でしたネ。山形大学で若き思い出を築き、幸せの一言で語り終える大切な二楽章でした。

終わりに農学部の発展を心より願っております。

追伸　伊藤尚武さん（昭和39年林学科卒）と連絡を取りたく、ご本人もしくは消息をご存じの方は鶴窓会事務局までご一報ください。

「日々新たに（PartⅡ）」

東京都練馬区在住
白石　雅美
（昭和48年農業工学科卒
昭和50年農学研究科修了）

仕事を離れてもう3年余り。長男家族と同居し、読書をしたり旅行をしたりと日々気ままな生活を送っている。山形生まれの私は懐かしさと新しい発見を期待してここ毎年、年に3～4回は山形県内を旅行しており、今年も1月には山形の各地に泊まり、初市を見物したり友人と旧交を温めたりしていた。しかしそれ以降はコロナの影響で旅行はできず、会合等も自宅でのZoom会議になり未だにStay Homeの状態である。

冒頭の「日々新たに」は好きな言葉で、出典は「湯之盤銘曰。苟日新。日日新。又日新。」（礼記「大学」）。「常にたゆみなく自己の改革をおこなえ」と解釈している。昨年春に旧農業工学科の同窓会誌キャタピラに寄稿した際の表題を「日々新たに」としたので、本稿をその続編として（PartⅡ）とさせていただいた。

自己の老後のテーマである「健康寿命を延ばし充実した時間を過ごす」ための1つの指針として「日日新」を座右に置いている。キャタピラでは以下のような内容を記した。

自己改革その1〈勉学〉：HTML、CSSを独習して…

その2〈運動〉：足腰の衰え防止に1日に3～4㎞は歩く…

その3〈感性〉：絵手紙を書く。練習無し、失敗無し、心を込めていつも本番…

その4〈社交〉：ファッションに気を配る。今までは縁がなかったが…

以後、1年余りのうちに以上に加え新たに2つのことに取り組み始めた。

その5〈修養〉：写経をおこなう。昨年11月に始め、つい最近105回目を数えた。準備も含めて2時間余りかかるが、一心に般若心経を写経する時間は心の平安をもたらしてくれる。

その6〈健康〉：減量による適正体重の維持。コロナ禍で外出が減った家内が料理や菓子作りに精を出した結果、あっという間にコロナ太りになってしまった。これを機会に30代の体重に戻そうと5月末からダイエットを始め、現在まで約7kgの減量に成功した。目標まであと3kg。その後はリバウンドなしに維持することが課題である。

今日も晩酌は好きな日本酒から糖類のない焼酎、ウイスキーに変えて頑張っている。

世の中は今大きな転換期を迎えている。今後の日本の安寧と更なる繁栄を心中願っている。

「呟き言」

岩手県盛岡市在住
赤澤　篤司
（昭和52年農芸化学科卒）

若い時に「鶴窓会だより」の原稿依頼があれば、私は断っただろう。今回は引き受けることにした。六十六歳の私は、三十代を「鬱」に失ってしまった。人生で一番輝く時である。仕事でも成果があっただろう。しかし、残念と言いたくはない。元気であった私を想像することは禁忌とした。

私は、「鬱」を抜け出すと、仕事以外の時間はすべて読書に費やした。ジャンルは問わず読みたい本を読んだ。厚い本を好んだ。一つだけ小説で思い出がある。大江健三郎の小説である。英語の本を読んでいるかのように国語辞書を引いた。五冊位読むと辞書を引かなくとも良くなった。読書は四十代の私を支えた。

短歌に出会ったのはそんな時である。感動的なことは何もない。単身赴任先から自宅に戻る